

中学校社会科における学習指導について③  
—コロナ渦における様々な制約を乗り越えての実践—

大嶋 正克・溜池 善裕

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第8号 別刷

2021年8月31日



# 中学校社会科における学習指導について③<sup>†</sup>

## —コロナ渦における様々な制約を乗り越えての実践—

大嶋 正克\*・溜池 善裕\*\*  
小山市立小山第三中学校\*  
宇都宮大学共同教育学部\*\*

COVID-19いわゆる新型コロナウイルスの世界的な流行は、教育界にも様々な影響と混乱をもたらした。特に深刻だったのは、突然出された3月2日からの一斉休校要請とその延長に伴う進度の大幅な遅れと、授業における感染拡大防止に向けた様々な規制によって、従来の学び合いが機能しづらくなった点である。

巷では、ICT機器の導入による授業のオンライン化こそが今後の状況に対処でき得る手段としてもはやされ、その方策に向けた取り組みが頻繁に紹介された。しかしながらそこには、教科として必要な知識と各自が持つ意見を効率的に伝達するための道具に過ぎない状況が浮かび上がる。限られた条件下においても、中学生たちが、主体的・対話的で深い学びを築き上げていく上で必要最低限の学習指導を紹介したい。

キーワード：中学校社会科、学習指導、主体的・対話的で深い学び、一人学習、共同学習、SDGs

### 1. はじめに

2020年度より中学校でも新学習指導要領の完全実施を控えている中、新型コロナ渦による感染予防の方策によって、教師と生徒或いは生徒間の交流が大きく制限された。とりわけ授業中における相互の発言が控えられたことは、新学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」そのものへの否定とも受け取られかねない状況を生み出し、中学校の現場で多く取り入れられているグループ活動ですら敬遠される事態となった。

約3カ月間にも及ぶ休校（業）期間によって、学習進度の遅れも深刻さを増していたことから授業

再開時に最優先されたのは、進度の遅れを取り戻すことであった。そのため、何をどのように学んだのかを問いかける授業の中身については、なおざりにされていたのである。

### 2. 学習指導の展開

#### (1) 進度の遅れを取り戻す

市教委から要請された最優先事項が臨時休業による進度の遅れを取り戻すことであったため、積み残してあった地理的分野と歴史的分野を短くなった夏休みまでの間にすべて終わらせた。教科書を中心とした詰め込み的な授業にならざるを得なかったが、休校（業）期間中に課題を提出させておいたことで、7月末日までには、ほぼ予定通りに学習内容を進めていくことができた。

#### (2) 学び合いの疑似体験

短い夏休みに入る直前の8月には、公民的分野の学習が始まった。当該学年である3学年の生徒たちの中には、1学年次において筆者が担任を受け持ち、なお且つ調べ学習や話し合いの授業を体験した生徒たちが数十名含まれている。その生徒たちを中心に、ゴミの収集場所を決める「自治会規約をつくろう」という課題解決的な授業を各クラスで行い、他者の発言を聞く

<sup>†</sup> Masakatsu OOSHIMA\* and Yoshihiro TAMEIKE\*\*: Learning Guidance in Junior High School Social Studies (3) Practice that I get over various limitation in the corona whirlpool

Keywords: Junior high school social studies course, Learning instruction, The learning that is like independent talks, and is deep, one-person learning, Combination learning, SDGs

\* Oyama Municipal Oyamadaisan Junior High School

\*\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

こと、それを通して皆で考え、課題解決に向けて話し合うことの大切さや楽しさを味わう場を設けた。

久しく集団的な学びの場から遠ざかっていた生徒たちにとって、このような授業は刺激的だったようである。今回、話し合いの学習をはじめて体験した3年4組の生徒HK女が書いた授業後の振り返りを紹介する。

話し合いには、とても時間がかかると思った。だから効率を重視してしまうのだろう。しかし、時間をかけない限り、公平な規約は作れないと感じる。まず、みんなで意見を出し、そこから一人ひとりが考えてさらに具体的に話し合い、意見を一つにしほりこむ。こんな話し合いができると思っていた。しかし、現実はいまよくいかない。私は、ねらいが達成できなかったということになる。今後、話し合いの授業の時、司会や書記や発表していない人の意見をきいてまわる人、話し合いの進め方を考える人など、何人か決めて自分たちだけでもやってみよう。(もっとレベルアップしたら)

今回の話し合いの最終的な意見としては、まず、今の収集所に柵をつけたり、新しい住民の人にゴミ出しに関する資料をわたしたりする。それでも新井さんが不満ならば、また話し合うという形が良いと考える。

生徒会役員であるHK女は、話し合いによって課題が解決できるものと思い、「実際に話し合って規約をつくる中で、誰もが納得し、公平な規約をつくるために、話し合い方に工夫をする」というねらいを設定していた。しかし、振り返りにも書いてあるとおり、自分とは違う思考や判断をする他者の存在を目の当たりにして、ものごとは決して効率的には解決していくことができないという現実と直面した。それでも安易に妥協するか諦めるというのではなく、粘り強く考え続けていくことの大切さが述べてある。とりわけ、今後も自分たちの力で取り組んでいきたいという主体的な態度が見てとれるのは重要である。

このように、話し合う機会を授業の中にもっと取り入れてほしいとの思いが生徒たちの間に広がっていったのを見計らったところで、指導を次の段階へと進めていった。

### (3) 学習内容に対する自己の考えを書いて表現する

擬似的な話し合いを体験して多くの生徒たちは、「自分の思っていることを上手く相手に伝えることができない」という思い(授業後の振り返りに記入)をもっていた。そこで、自分の考えを文章化する作業を本格的に実施する。

夏休みが明けるとともに、授業終了までの15分間を確保し、本格的な「振り返り」を書かせるようにした。この「振り返り」では、授業に対する感想だけに留まるのではなく、授業開始時に示される「ね

らい」に基づいた内容に基づいて書くよう指導した。毎回授業の度に書かせるほどの時間的な余裕はとてもないので、小單元ごとにその場を設定し、学校行事や定期テストとの兼ね合い等を考慮しながら生徒たちに負担をかけないように、3～4回ごとに1度ノートを提出させて、全員のノートに赤ペンでアドバイスやコメントを記入した。当然、「振り返り」として書かれる内容は、その着眼点や意見が個人によって大きく異なるのであるが、共通して言えることは、どの生徒たちも回数を重ねていくごとに関連させる社会的事象が増えていき、それに伴って分量も増加していくことである。

文化とは、自分を表現するために必要なものだと思う。私はこういう文化で、このように生活しているという表現。だが、その文化の見方によって差別や偏見を生み出してしまうのは問題だと思う。なので、互いの文化を理解し、尊重し合っていくことが大事だと思う。

これは、3年5組NY男が、「振り返り」を記述し始めた7月後半頃の文章である。「私たちの生活と文化」という単元で、一通りの授業を終えた後で記述したもののだが、自分の意見が結論めいた一文に留まっている。また、どんな事象から自分の考えが導かれたのかという具体的な記述も見られない。しかし、11月中旬頃に実施した「消費生活と経済」では、

経営者が利益を出そうとすると卸売業者の仕事が減る。安い商品をたくさん売ることによって利益を上げようとする、その競争について行けなくなった企業は落ちこぼれていく。経営者、消費者が利益を求めつづければ、社会の流れに対応して変化を続けなければいけなくなる。流れに対応できないと、落ちこぼれる。利益を上げやすい社会に対応して変化していけるのは大企業のみで、個人経営だと利益を上げづらく、すぐに対応していくことも難しい。こういう仕組みにより大企業はどんどん成長し、それ以外の企業はどんどん力が無くなっていき、つぶれる。そういう姿を見ているから新たに企業を立ち上げる人は減る。そんな停滞した社会に変化をもたらすには、産業革命やエネルギー革命、インターネットの普及、はたまた法律の制定など、大規模な変化が起きなければいけないと思う。すべての人が、すべての企業が等しく成長できるわけは無い。競争という仕組みがある以上どうしようも無い。ただそれでも一つ、二つの一握りの企業が、集団が成長していくのは、防がなければいけないと思う。

と記述するようになり、授業で学んだ知識のみならず、ニュースや報道といった日常生活で知り得た情報とも関連付けて自分の意見を述べるようになっていくのである。

### (4) 集団の中で堂々と自分の意見を発表する

「振り返り」を書かせる指導と同時に、その書い

た内容を発表する場を設けた。「振り返り」を記入した後、時間があればその日のうちに発表するが、時間がなければ次回の授業の冒頭で3名ずつ発表することとし、12単元でクラス内の生徒全員が発表し終える。積極的な挙手制とするが、全員に発言する機会を確保するため、これまでに発言した生徒は除くこと。また、誰が発言するのかは、前に発言した生徒が指名することにして、相互指名にも慣れさせた。

私立高校の受験がひと段落し、3学年の履修内容(教科書の内容)を終える見通しがたった1月下旬。これまで急ぎ足で終えてきた学習内容を補足し、さらに発言内容を相互に関連させるために、映画作品やTV番組のドキュメンタリー作品を鑑賞する機会を設け、その内容について意見を述べ合う授業を行った。内容が具体的でわかりやすくなるため、各自が社会的事象に対してそれなりの認識を得られるようになる。結果、学力差のある生徒間であっても、意見を噛み合わせることができるのである。

#### (5) 自ら調べることの必要性を理解させる

先程述べたように、鑑賞した映画作品やTV番組のドキュメンタリーといった類いの作品は、その内容がストーリー性を帯びたものとか内容が具体的であるため、理解しやすい。相互に意見を関わらせる経験を得たことで、生徒たちは、ものごとを具体的に理解することの大切さを学んだ。

そこで、社会科学習の集大成として位置づけられている単元「より良い社会を目指して」において調べ学習の機会があることを伝え、自分の興味・関心ある事象について調べようとする機運も高めることができたのである。

### 3. 授業の実践

#### (1) 単元づくりと授業の開始(共通テーマの設定)

新学習指導要領の公民的分野の内容D「私たちと国際社会の諸課題」にある最後の中項目(2)「より良い社会を目指して」から、「持続可能な社会の形成」という観点を踏まえて設定した。新学習指導要領では、社会科のまとめとして位置づけ、課題を多角的・多面的に考察、構想し、自分の考えを説明、論述することや、探究するために適切かつ十分な授業時数を配当するよう求めている。

学年末テストを終えた2月中旬より単元開きとして各クラス毎に、共通テーマを決めさせた。筆者が担当するクラスは3年4組、5組、6組、7組の合計4

クラスで、それぞれ話し合いの結果、4組と6組がともに「持続可能な関わり方」、5組は「持続可能な校則の在り方」について、7組は「持続可能な子どもの人権」と決定するに至った。中でも4・6組については、社会科学習のテーマとして少々違和感を覚えるようなものであるのだが、クラスが抱える実情を素直に反映させたものであり、これについては後述したい。

#### 生徒の追究過程(予測)

- 第1次 自分たちが暮らす社会の現状と向き合い、関心を持つ
- 第2次 現在の社会から、未来の社会の在り方を見据えて追究していく
- 第3次 様々な学習効果を持ち寄り、今後の社会の在り方について語り合う

#### (2) 個人の追究テーマ決定と一人学習の開始

各クラスで決められた共通テーマを解決へと導くために、何を糸口に調べていけばよいのか。各自が今まで抱えてきた問題意識や具体的な経験をもとに、筆者が個々の生徒たちと意見交換をしながら一人学習(調べ学習)の追究テーマを決めていった。すんなりと決まった生徒もいれば、何時間もかけてようやく決まった生徒もいる。中には自分の問題意識が希薄であるが故に、調べていく過程で何度も追究テーマを変えた生徒もいた。ここで大切なのは、一人ひとりの生徒と真摯に向き合うことである。主体的な学習をしていくのであるから、何を調べるのかを決めるのはあくまで生徒自身である。しかし、それを全て生徒に委ねてしまうのであれば、学習指導とはいえない。奈良の学習のように、小学校や学級担任なら日常の日記指導からその子の生活環境や問題意識から導くことは可能である。中学校で教科担任のみの関わりという条件下では、テーマを決めあぐねている生徒と時間の許す限り意見を交わし、ノートを交換していくことで導いていった。

一人学習(調べ学習)にあたっては、新型コロナウイルス対策として市から導入されたばかりのタブレット端末を使用し、6時間程の授業時数を充てた。また、スキルをもつ生徒については、USB等の機器を持ち込ませてレポート作成にも利用させた。

#### (3) 共同学習(授業分析)

残る授業時数の関係から7組が2月24日の4校時、あとは3月1日の3校時に4組、4校時に6組、5校時に5組でそれぞれ共同学習を実施した。なお、紙幅の都合上、授業記録の掲載は割愛する。

4クラスで共通しているのは、まず、一人の発言が長いということである。特に5組の授業「持続可能な校則の在り方」については筆者が時間配分を間違えてしまい、振り返りを書かせることなく延々と話し合いを続けていたにも関わらず、発言した生徒の数は9名と少なかった。これは、個々の生徒がある程度の深さまで調べ学習を行っていたことにもよるのだが、授業をきっかけとして級友や周囲の教師たちに「言いたいこと」があったことに起因している。追究すべきテーマは、各クラス毎に設定されているのだが、そのどれもがこれまでの学校生活上の経験に基づくものと、そこから湧き出たある種の疑問が発端となっていたからである。即ち、自分はいじめを受けていたにも関わらず誰も助けられなかったという切なる思いや、学校の制度上の問題や教師の生徒に対する関わり方への不満が「持続可能な関わり方」という人間関係づくりのテーマへと導いたのであり、同様に「校則」や「子どもの人権」についても、自分たちの思いを聞いてくれる相手を探し求めた末に辿り着いたテーマと考えられる。4組では、授業の終盤にES女とSY女が、小学校時代からいじめられていた事実を告白し、参観していた教頭と校長に生徒の声を聞いて対応してほしいと願いをぶつける発言をしている。5組でも「校則」をテーマとした話し合いであるが、SN女が過去のいじめ体験を絡めて校則の必要性を訴えかけている。

一方、7組では、「子どもの人権」というテーマはあるものの、授業で話し合われたのは、卒業式を中心とした学校行事に自分たちの意見を反映させる場を与えてほしいという願いである。5組の「校則」についても同様に、見直す機会や生徒の意見を聞く場を求める内容の話し合いが行われていく。

次に共通点としてあげられるのは、話し合いの途中で生徒たちによる捉え直しが行われていることである。4組は、関わり方について、他者をどう受け容れて理解していけるのかが話題の中心であったところ、先に述べたように2名の女子生徒が自分の内面に溜め込んでいた思いを表出させる場面が起きた。5組では、授業の冒頭で校則を必要と考えるSM女とSN女の女子生徒2名に対し、その弊害をKN女とNY男が指摘している。6組では、4組と同じテーマであっても、感情を剥き出しにするような発言は見られなかった。他者の考え方や認識は多様であるから真に分かり合うことは難しいとしながらも、そ

の要因を学校の教育制度に求める意見が出されている。7組も生徒の意見を聞くことがない教師や大人の態度に対して批判的な発言が続く中、経験の少ない子どもの考えだけで行事やものごとを決めていくことも問題であるとする発言がなされている。一時の感情に任せて話し合う内容をリードする場面がある一方で、それらを受け止めつつも冷静に違う視点から捉えていこうとする構えも見られるのである。

#### 4. おわりに

大幅な学習進度の遅れ、飛沫感染防止の観点からグループ活動やコの字型座席の禁止といった数々の制限が設けられている昨今にあっても、要所を踏まえた学習指導によって、生徒が主体的に行う話し合いの授業を実施することができた。それは、本実践の成否の鍵が何かの「型」に頼ったものではないことを示している。

自分の考えを適切に言語化すること、その意見を発言すること、互いに発言内容を尊重しながら聞き合えること<sup>(1)</sup>、興味・関心の赴くまま自らが追究し続けること、の大切さを理解し、集団内（学級内）での共有化が図れば良いのである。これは、重松鷹泰の示した4つの原則即ち－追究心育成の原則・個性的思考重視の原則・創造活動重視の原則・共存の感情育成の原則－<sup>(2)</sup>にも通ずるものである。こうした要素を効果的と思われるタイミングと手法によって意図的に行っていくことこそが、新学習指導要領の掲げる「主体的・対話的で深い学び」を成立させる上で必要とされる学習指導なのである。

#### 注

(1) 拙稿『中学校社会科授業における「話し合い」の成立に関する一考察－歴史的分野「ホフマン窯」実践の分析を手がかりとして－』（『平成17・18年度宇都宮大学大学院教育学研究科派遣研修報告書』,2007年）

(2) 溜池善裕「社会科教育における重松鷹泰の授業分析研究の意義－「子どもがする授業」の発見と追究に着目して－」（『社会科教育研究』no121,2014年）

※本論文は全文を大嶋が執筆し溜池が字句等を訂正して成った。JSPS:20K02727の助成を受けた

令和3年4月1日 受理





**Learning Guidance in Junior High School Social Studies (3)**  
**Practice that I get over various limitation**  
**in the corona whirlpool**

Masakatsu OOSHIMA and Yoshihiro TAMEIKE